

障がい者の生涯学習の視点を中心としたインクルーシブな活動の展開と検証

：地方地域におけるスポーツ活動

看護福祉学部福祉マネジメント学科 講師 近藤尚也

【背景】

近年、文部科学省を中心に「障がい者の生涯学習」に関する取り組みが進められており、北海道においても、令和 2 年度から文部科学省委託の「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を受託し、学校卒業後の障害者の学びの場を拡充が進められている。主に都道府県(政令指定都市含む)を核として、大学等の高等教育機関、地元の企業、社会福祉法人や NPO 法人などが連携し、障害者本人も参画した地域コンソーシアムの形成による持続可能な学びの支援の実現に向けた取り組みが行われてきた。具体的には、各団体が実施する事業の情報共有、道内市町村教育委員会を対象にした障害者の生涯学習推進に係る実態調査、モデル市町村における市町村地域連携コンソーシアムの構築に向けた実証研究などが行われている。北海道の生涯学習の実態については、コンソーシアムをきっかけに可視化され始めているが、当事者のニーズ調査等による現状と課題の把握やそれを踏まえた機会の創出、情報の一元化などが課題として挙げられている。

研究代表者は過年度に障がい者の生涯学習に関するニーズ調査を実施して、本人、支援者、学校教員の視点からそのニーズを明らかにした。その結果、スポーツやレクリエーションに関するニーズが高い傾向であることが明らかとなった。また、地域によっては、既存の活動の場があっても十分に社会資源化されておらず、今後インクルーシブなものとして知的障害者等が参加しやすくなるよう働きかけて、障害者が身近な場で参加できる生涯学習活動につながっていくことが期待されることが示唆された。

このような背景のもと、今回の研究では、スポーツ活動を中心とした生涯学習活動について、特に社会資源が少ないと考えられる地域で生涯学習を展開できるモデルを提案し、実際にその展開の有効性について検証を行っていく。

【目的】

本研究では、特に社会資源が限定される地方地域における障がい者の生涯学習の場の確保に焦点を当て、その実践的なモデルの試行と検証に取り組んでいく。

【方法】

A 町において 2023 年より開始されたポッチャ活動に参加し参与観察を行うとともに、参加者へのアンケート調査を実施した。アンケート調査(選択式、一部記述あり)は、初回の

活動終了時及び、6回目の活動終了時に配布し、その場で回収を行った。

【成果と考察】

<活動について（参与観察）>

2023年2月から現在までの期間において、2か月に1回の頻度で実施されている。2024年2月までの参加者は、1回目22名、2回目8名、3回目14名、4回目12名、5回目9名、6回目7名、7回目10名の参加があった。毎回1人以上障がいがある方の参加がみられた。参加者の多くは定期的に活動に参加するものであった。

活動はA地域の障がい者スポーツクラブ、社会福祉協議会、当事者団体等が中心となり実施された。主ターゲットを身体障がい者としたが、その当事者団体は、加入者の高齢化が進んでいる状況で、活動の機会が減少傾向にあり、こうした取り組みの場の提供が社会参加の場につながっていた。

<アンケート調査について>

初回実施時回答数14件、6回目実施時回答数5件であった。調査項目は基本情報のほか、スポーツの頻度、実施内容は良かったか、学びにつながる活動であったか、参加者と交流できたか、また参加したいか、定期的な活動の希望状況、自由記述とした。回答者の多くは活動に肯定的で「また参加したい」、「定期的に活動があるよい」といった点がみられた。「参加者との交流」について、初回は「交流できた」の割合が高かったが、回数を重ねた後は「とても交流できた」の割合が高くなっていた。

わが国の身体障がい者について、令和5年版障害者白書によると約436万におり、人口千人当たり34人の割合であるとされている。また、身体障がい者の72.6%が65歳以上の高齢者となっている。本取り組みは身体障がいの方を中心に組み立てられた。近年、身体障害者福祉協会に所属する会員は年々減少傾向にあり、また、会員も高齢化が進んでいる現状がある。加えて、特に人口が少ない地域になると、そもそも障がいのある方自体が少ない状況であり、障がいのある人のない人も一緒に集まれる場が求められる。

ボッチャは様々な人が取り組みやすい種目であり、本取り組みはその利点を活用し、有効な場の導入になりうるものであることが示唆された。また、地域に存在する複数の団体に関わり実施することで、これまで参加の機会が少なかった人たちへの社会資源の再資源化にもつながったと考えられる。一方で、より参加者が増えていくための工夫も求められる。

今回、身体障がい者以外の当事者も参加している障がい福祉制度で規定される協議会を通じた活動の実施を進めたが、事情により中止となってしまった。今後改めて進めていくことで、多様な方への生涯学習活動の場について、検証を進めていきたい。本研究において一つのモデルとして、活動の場の提供方法に関する一定の成果を得ることができたと考える。なお、現在ボッチャ大会開催も企画されており、大会参加を目標とした定期的な活動参加へ

の動機づけの効果について、地域特性との関連からの検証することも今後の課題である。本研究の限界として、地域の状況から対象となるものが限られていたため、今後より広いデータの蓄積が求められる。

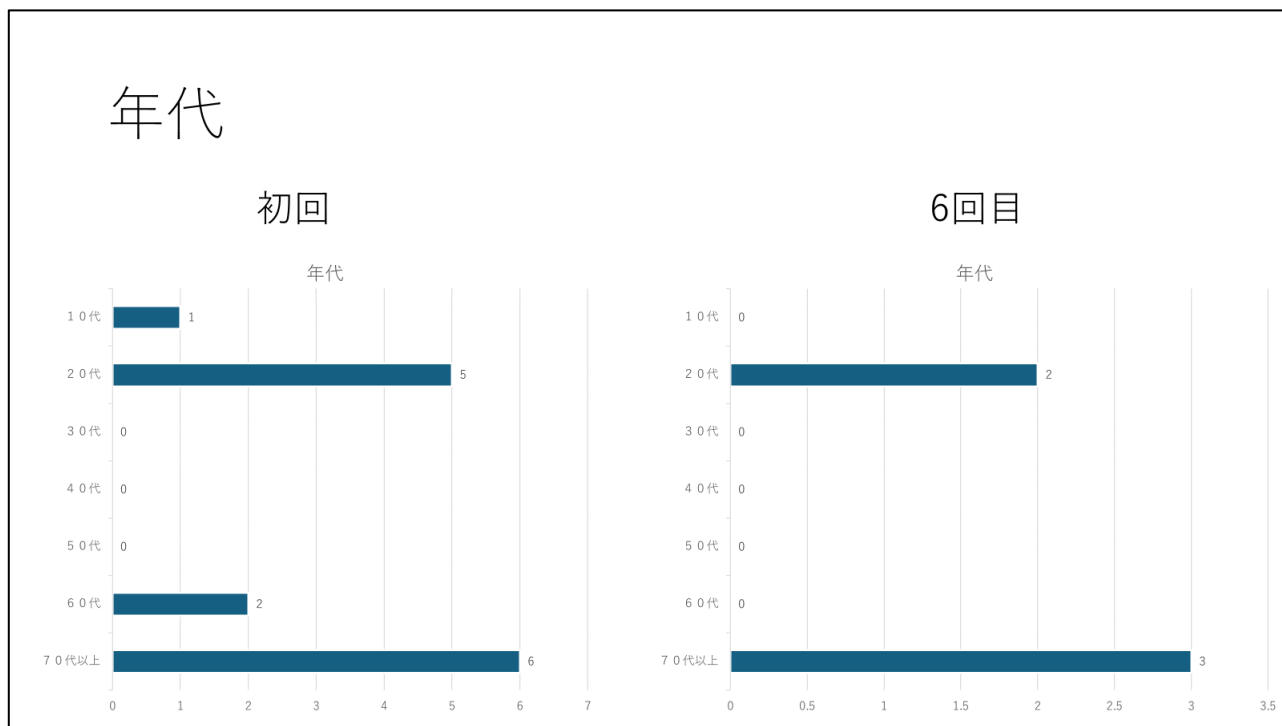
研究報告

近藤尚也（2023）「障がい者の生涯学習を見据えた活動づくりの一考察－A町におけるボッチャ活動の事例から－」2023年度北海道社会福祉学会研究大会、口頭報告

参考（アンケート結果）

初回 n=14

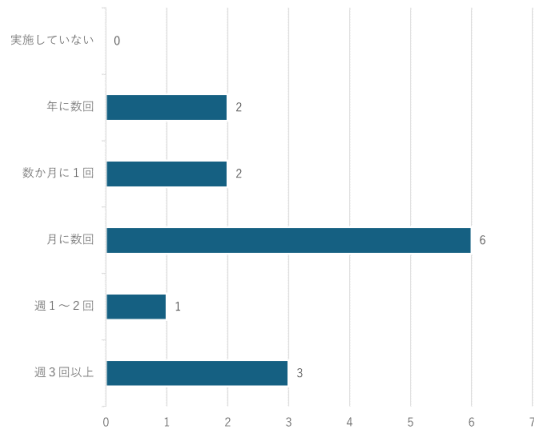
6回目 n=5



スポーツの頻度

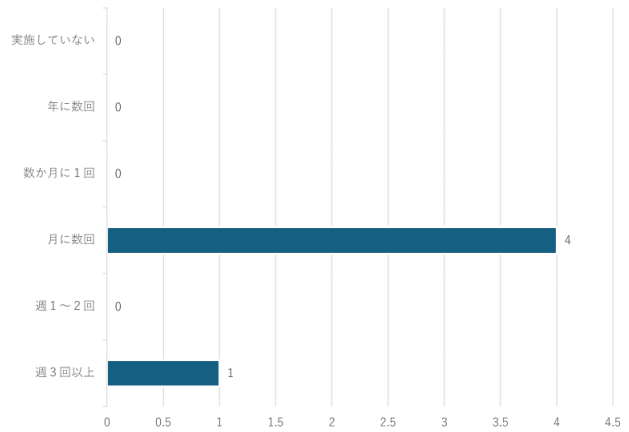
初回

現在の運動・スポーツをする頻度



6回目

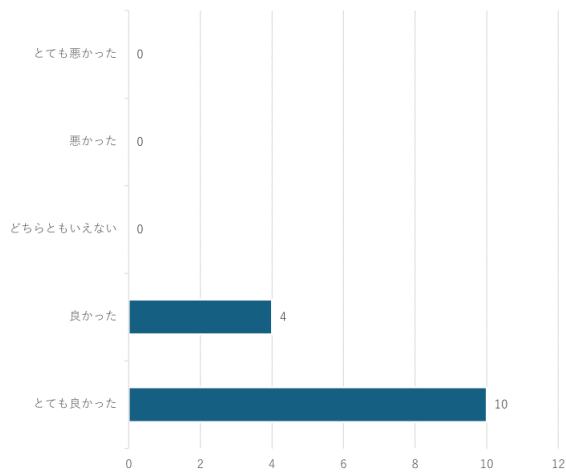
現在の運動・スポーツをする頻度



実施内容

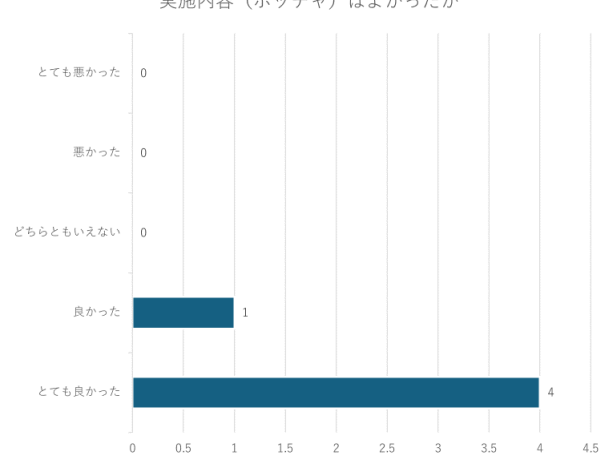
初回

実施内容（ポッチャ）はよかったか



6回目

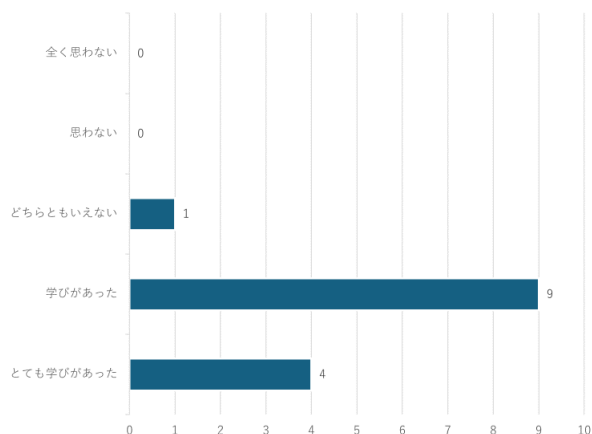
実施内容（ポッチャ）はよかったか



学びにつながる活動であったか

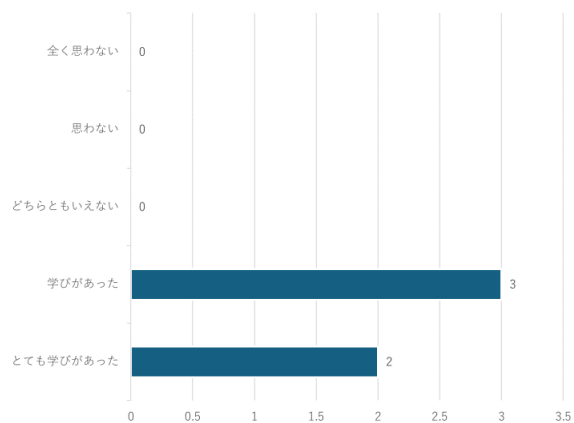
初回

学びにつながる活動だったか



6回目

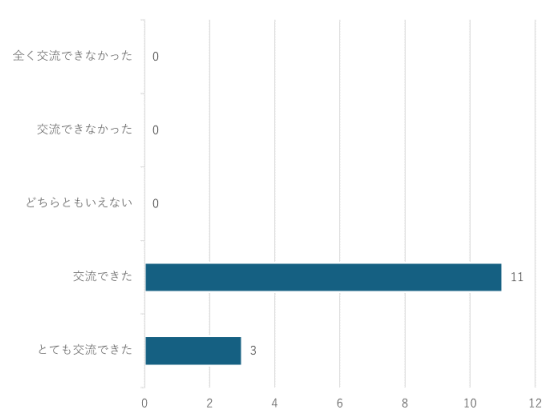
学びにつながる活動だったか



参加者と交流できたか

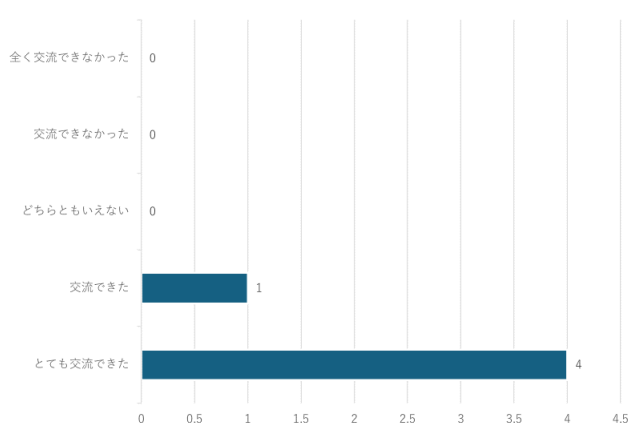
初回

参加者との交流はできたか



6回目

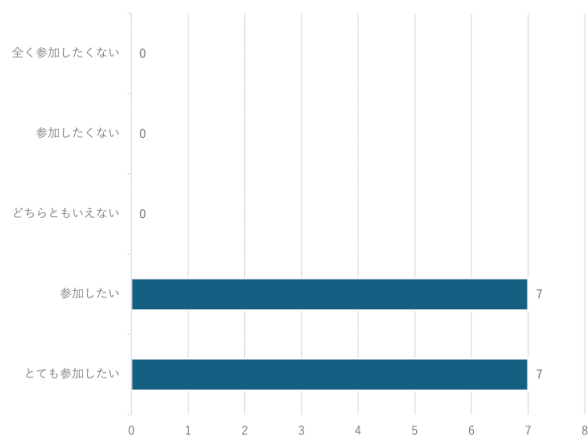
参加者との交流はできたか



また参加したいか

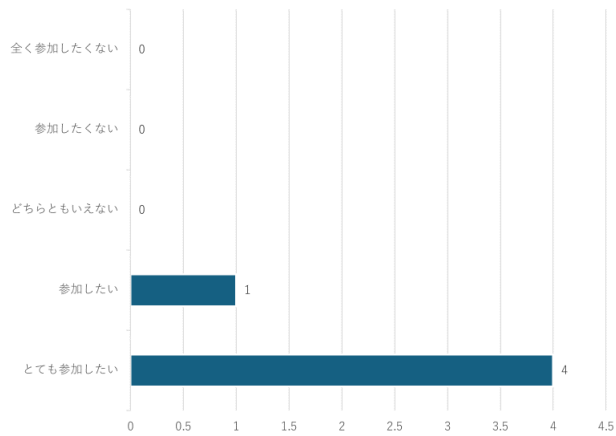
初回

また参加したいか



6回目

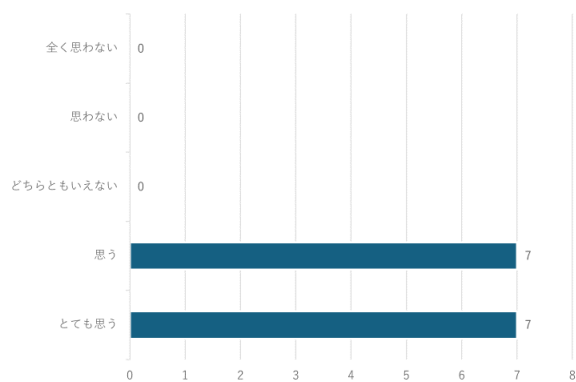
また参加したいか



定期的な活動希望

初回

定期的に活動があると良いか



6回目

定期的に活動があると良いか

